令和元年度　横浜市世界を目指す若者応援事業

（個人留学による帰国報告）

●氏名

Y.H さん

●留学先

国/都市：アメリカ合衆国/エリコットシティ（メリーランド州）

外国の高校：Mt. Hebron High School

●留学期間

2019 年８月７日～2020 年３月２１日

●留学先での活動、留学で学んだこと

まず初めに、小さなころからの夢だったアメリカ留学を叶えるために私を応援し支えてくれた家族、ホストファミリー、学校、AFS の方々、友達、そして横浜市世界を目指す若者応援基金に賛同してくださった皆さん、その他たくさんの方々、ありがとうございます。私の留学の目的は皆が生きづらさを感じない世界を作ることに貢献することです。そして、この目標を叶えるために、私がアメリカで学びたいと思ったことは３つありました。それは主体性、多様性の理解、SNS の利用方法について知ることでした。実際にアメリカで生活し、それについてどうであったか、報告します。

第一に、主体性についてです。最初、私はアメリカで主体性ではなく自主性について考えようと思っていましたが、帰国して振り返ってみると、アメリカの仲間たちの行動についてふさわしいのは自主性ではなく、主体性の方だと思いました。なぜなら、自主性は言われたことを自主的にやることで、主体性は指示のない状況で、自分でやることを考えてやることだと思ったからです。思った通り、アメリカの高校生は高い主体性を持っていました。大きな理由は周りの環境だと思います。アメリカは車社会で、免許が取れるまで行動が制限されている上に、何をするにも親の助けが必要なので、自立への意識や欲求が高いのではないかと思いました。そして、両親が共働きの家庭も多いため、自分でやらなければいけないことが多く、主体性が育つのだと思います。その影響を受けてか、私も主体性が身につきました。

アメリカでは留学生とわかってもらえないためか、誰も声をかけてくれないため主体的に行動しなければなりませんでした。友達を作るために、人と会える機会をたくさん作ろうとボランティアやクラブなどいろいろなことに挑戦しました。いろいろなボラン

ティアの中で一番印象に残っているのは Canned Food Drive です。Canned Food Drive はサンクスギビングに助けが必要な家庭のために、腐らない食べ物や缶に入った食べ物の寄付を募り、必要な人に届ける活動です。私たちは寄付を募るところから始め、作ったポスターを近隣の家のポストにはさんだり、レストランや図書館の前で募金を呼び掛けたりしました。寄付を集めるのは大変でしたが、道行く人が私の声に足を止めて募金をしてくれました。最終的に必要な家庭に食べ物を届け、Canned Food Drive は終わったのですが、ボランティアは思った以上に楽しく、達成感があり、これからも何かに貢献出来たらいいと思いました。アメリカでボランティアが盛んなのは、ボランティアは大変なだけでなく楽しいものだとみんながわかっているからだと思います。また、アメリカの学校ではホームページにボランティアの情報が載っていたりと、身近にあってやりやすいものだからだと思いました。

もう一つ印象に残っているのは AFS 主催のデラウェア州にある Bethany beach でのボランティアです。ボランティアを通して会ったことのなかった留学生とも知り合うことができ、充実した時間を過ごせました。アメリカではボランティアが仲間づくりの場になっていて、やらなければいけないものでなく、やりたいからやるものとなっているので楽しめるのだと思います。学校で一番最初に私が主体性を発揮したのは、アメリカについて 1 か月もたたない頃、学校で開催されるミュージカルのオーディション情報を学校のウェブサイトから自分で見つけ、参加したことです。アメリカに行けば何もしなくても周りが私を助けてくれて、私がやりたいことができると思っていましたが、実際は待っていても何も進みませんでした。そこで自分で行動を起こすことにしました。オーディションの日が、私が初めて学校に行った日で、初めてアメリカの高校生に会い、私はとても緊張してしまったのですが、自己紹介をすると緊張している私を察してか、皆が温かい雰囲気で拍手をしてくれて、何人か応援の声もくれてとてもうれしかったし、少し緊張が解けたのを覚えています。アメリカ人の、他人をすぐ褒めたり、知らない人でも応援してくれる優しいところを見習いたいと思った瞬間でした。主体性にもかかわることだと思うのですが、褒めることでも何でも、思ったことを口にするアメリカの人に対し、日本人は思っても口に出さないことが多いと思います。これは一人一人が主体性を持っているアメリカ人に対し、周りと違うものを排除しがちな日本の文化と関係していると思います。それぞれが良いと思うことは褒めたり、励ましたりしてお互いを高めていくべきだと思いました。

一方で、はっとしたこともありました。私の友達は学校で昼休みに、自分の政治に関する意見や貧困問題、女性の権利問題などについて、他人ごとではなく議論していました。他にも、パレスチナからの留学生と話していて、日韓問題について聞かれてびっくりしました。自分と関係ない国の事まで興味を持って調べて私に聞いてくる姿勢を見て、世界にはこんなにいろいろと考えている人がいるんだと驚きました。日本では、考えている人はいても、友達同士で話し合ったり、意見を言ったりすることは少ないし、特別のことのように思います。アメリカで社会問題を話し合うのが普通なのは、主体性があり多様性の理解もあり、話し合ってもよいという風土があるからだと思います。世界の

ことはともかく、日本のことは学校で習うことはもちろん、自分自身でも、もっといろいろと調べたいと思いました。また、質問されたことで日本の政治や歴史に興味をより持つようになりました。こういった視点を持つことができたのも、この留学の成果の一つです。

第二に、多様性については、想像していたものとは少し違った部分もありました。想像していたのは、言葉通り“人種のるつぼ“でしたが、実際には同じ人種の人同士でグループを作っていることが多かったです。アメリカの多様性は、皆が一つ同じ意見になることを目指すのではなく、互いの違いを認め合いながら意見を尊重しあうことなのだと実感しました。みんな留学生の私に親切でしたし、あえて声をかけてくれた優しい人も多かったですが、実際に”私“に興味を持ってお互いに話すようになったり、友達になれたのは、アジア系の子や人種的に少数派の人たちでした。一方で、人種の多様性だけでなく、年齢の多様性も見られました。年齢関係なく冗談を言ったり遊んだりしていて、私の所属していたダンスチームでも、下級生が上級生にアドバイスしたり、振り付けや練習計画について活発に意見を言っていました。誰でも意見を言える環境は魅力的だと思います。多様性の理解を深めるためのヒントは、授業のスタイルに隠されている気がします。一つとして、グループプロジェクトが多く、皆で話し合って一つの目標を達成する機会がたくさんあることが挙げられます。例えば、私の受けた授業では、数学の授業で 5、6 人のグループに分かれ、各グループが割り当てられた範囲の勉強をして授業計画を立て、先生の代わりに他の生徒に授業をするというグループプロジェクトがありました。他にもいろいろな多様性に触れることができましたが、その一つは私のホストファミリーです。私のホストファミリーはシングルペアレントでした。アメリカでは離婚家庭が多く、シングルペアレントは珍しくないようです。両親がいて、母がいつも家にいてくれる私にとって、ホストファミリーとの生活は日本の生活とは全く違ったものでした。しかしそのおかげで、なんでも自分でする習慣を身に着けることができました。また、そんな忙しいホストファミリーでしたが、私の習い事の送り迎えをしてくれたり、会社を早退してクラブの保護者会に出てくれたり、感謝してもしきれません。夏と冬の休暇には普段家族で過ごせない分、長い旅行に家族で行ったり、サンクスギビングやおばあちゃんの誕生日には、親戚が集まる大きなパーティーに連れて行ってくれました。おじいちゃんとおばあちゃんが私のバレエの発表会を見にも来てくれて、私を本当の孫のように扱ってくれたのが、家族として受け入れられたようでうれしかったです。

第三に SNS についてです。SNS はアメリカでもほとんどの人、知っている人は全員 SNS を使っていました。学校内でも携帯の使用は自由で、先生によっては授業中に使用を許可する先生もいました。一方で、罰則も厳しく、心に病を持った生徒の写真を無断で撮って SNS に上げた生徒が校長先生に呼び出されて、直後に合ったホームカミングという高校生にとっての重大なイベントに参加することを禁止されました。携帯の使用の自由が許されているのは、その一方で SNS の監視や罰則がしっかりしているからだと思いました。私はもともと学校に関係することで SNS を使うことは否定的でしたが、SNS

を通して友達ともっと仲良くなれたり、SNS を利用して募金の声掛けをしている友達を見たりして、SNS も使い方次第だと感じました。

留学を通して成長できたことはたくさんありますが、一方で後悔していることもあります。それは留学の前半部分で、留学生としての自分を前面に出しすぎて、私自身がどんな人か周りの人に知らせることをできなかったことです。挨拶するときにいちいち留学生であることを言ったり、何かと日本のことを持ち出してしまったりしました。後半になって深い関係の友達を作るためには私自身を見せる必要があることに気づきましたが、初めから留学生としての私ではなく、私自身の魅力をみんなに見せられたらもっと人間関係が広がっていたのではないかと思います。留学中は、何でもない毎日や、学校に行くこと、友達と話をすること、友達をもっと増やすことのような平凡なことがどこかへ観光へ行くよりもとても大切で、何よりも楽しかったです。この感情を忘れず、日本の高校生活も毎日毎日大切に過ごしたいと思います。

コロナウィルスによって早期帰国を余儀なくされ、経験できるはずだったアメリカでの最後の３か月を失いました。この３か月で英語力はもちろん上がったはずですし、出演するはずだったミュージカルの公演も、出場するはずだったソフトボールの試合も参加できなくなってしまい、とても楽しみにしていたプロムも参加できず、ホストファミリーと計画していたキャンプやボルティモアでのお花見も全部なくなってしまいました。この３か月はとても大きいし、何より私は帰国の心の準備が全くできていませんでした。友達や先生、クラスの仲間にさよならを言うことさえできませんでした。まだまだやりたかったことがいっぱいありましたし、悔しくて悔しくて悲しくて心に穴が開いたような感覚です。この悔しさはなかなか消えませんし、失った３か月は二度と戻ってこないけれど、留学中に学べたこと、成長できたことを基に次の目標に向けて頑張り続けたいと思います。この報告書を書いていて、その時は一生懸命で全然思い付かなかったけれど、自分が成し遂げたこと、得られたことよりも、やれなかったことのほうが心に残るということに気づきました。後悔の残らない経験はありませんが、今回やれなかったことは次はやりたいと思います。この留学を終えて、これからはまずは社会問題について調べることと、ボランティアに参加したいと思うようになりました。将来のことはまだわかりませんが、最終的に皆が生きづらさを感じない世界を作ることに貢献することにつなげていきたいと思います。

最後に、ここまで私の留学を支えてくださった皆さん、本当にありがとうございました。

American Government、Leadership と Dance の授業で時間をいただき、日本についてのプレゼンテーションを行い、日本のことをより知ってもらうことができました。また、学校で行われたインターナショナルフェスティバルにも参加し、着物を着て日本紹介をしました。

冬のシーズンは留学前からやりたいと思っていたダンスチームにトライアウトを受けて入りました。バスケットボールの試合のハーフタイムにパフォーマンスをしたり、コンペティションに出てチームで１位をとれたのは最高の思い出です。練習後にメンバーとドーナツ屋さんによったり、試合前にメンバーの家でみんなで朝食を食べたり、試合の後に打ち上げでレストランで食事をみんなでしたりしたのは本当のアメリカの高校生を経験できたようでした。